



西原千博先生をお送りする

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菅原, 利晃 メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/10721

西原千博先生をお送りする

菅 原 利 晃

西原千博先生は令和二年三月をもって、北海道教育大学教育学部教授（札幌校）を定年退職された。

西原先生のご経歴については別に示されているので略すが、北海道教育大学教育学部札幌分校（当時）には昭和六十二年七月に着任された。

西原先生は、近代小説の研究者である。特に芥川龍之介や堀辰雄、福永武彦などの作家について、作品分析を中心に考察されてきた。その分析のベースは構造主義に基づく文学理論であり、さらに、読者の視点から作品を分析し、読書とはなにか、延いては文学とはなにかという問題について、研究を重ねられてきた。

西原先生は、本学の管理運営の中枢に参画され、洞察力、判断力、実行力、構想力を遺憾なく發揮して、学内の諸制度の整備、諸問題の解決などに貢献された。札幌校の各種委員会委員や、国語教育専修・国語グループ・国語教育分野の代表、附属図書館札幌館長などについては言うに及ばず、入試関係の学長特別補佐を永らく勤められた後、評議員一期を経て、副学長に

任命された。附属図書館長を兼任し、アクティブ・ラーニング時代に即応した図書館へと変貌を遂げる大改革を主導された。

ところで、西原先生が着任された昭和六十二年と言えば、札幌分校が藻岩校舎からあいの里の新校舎へ移転した年である。当時私は学部二年目であった。大学周辺には、住宅どころか、商店なども何もなく、前年十一月に開業したばかりのJRあいの里教育大駅（開業当時は国鉄）から、徒歩二十分離れた場所にある大学の新校舎が遠くに望み見ることができるような様子であった。

そんな中、大学からの帰りに地下鉄に乗っていたところ、西原先生とはじめて出会ったのである。どなたかを介してお話したのだったと思うが、ご丁寧な方なのだなあという印象と同時に、鋭い眼光をもった方だなあという印象をもったものである。

学部三年のときに、西原先生のご講義を受けたことがある。「近代文学演習」という講義で、私の担当は、芥川龍之介「黄粱夢」であった。今思えば、ちまちまと語句や、出典・類話を

調べただけの幼稚な考察であったが、西原先生は私の思いも寄らない発想で作品を快刀乱麻を断つがごとくスパッと分析されたのである。それと同時に「それがどうなの」という冷徹なほどの解釈をされたことが記憶に残っている。さらに、私に対しては、語句を調べたりするだけの、本文べったりの姿勢を評されたのだが、もっと頭を柔らかくしなさいというご指摘でもあった。

平成二十三年八月教員免許状更新講習で、西原先生の講習「文学教材の研究」を受けたことがある。「夏の葬列」を用いたご講義では、「教科書としての読みとは違う。」「ここは小説としては失敗。」と説かれ、私をはじめ出席していた現場の先生方の凝り固まった読み方を、バサリと切り崩すような解釈をされていたのである。

先生は、文学と教育とのつながりを唱えられてきた。これに関するご論考は数多くある。例えば、「文学教材と文学研究・実践編(1)―安房直子『鳥』―」(『札幌国語研究』第七号、二〇〇二年六月)では、「国語科教育における文学教材の分析と、近代文学研究における作品分析とは、本来同じものであるはずではないのか。しかし、実際には、大学の研究と学校の現場とは違うという話をよく聞く。文学研究は教材分析に何らかの貢献をし得ないものだろうか。」と問題を投げかけている。それには、さらに次のような言がある。

教師は生徒よりも既成概念に縛られやすいのであり、とも

すると、硬直した読みに陥りやすい。

思うに、西原先生の近代文学ゼミには、近代文学を研究したという学生ではなく、むしろ西原先生のお人柄と観察眼に惹かれ、西原先生に教えを乞いたいという者が多かったように察する。それは西原先生から近代文学の読みを通して、既成概念や硬直した考え(中には悩みやもやもや感のようなものを抱えた学生もいたのかもしれない)にとらわれがちな自分たちに対する、何かしらの教え・答えを求め得ようとする者がいたということなのかもしれない。

令和二年二月一日(土)、北海道教育大学札幌駅前サテライトにて、西原先生のご退官記念のシンポジウムを開催した(さっぽろ国語教育研究会、釧路国語教育学会共催)。テーマは、「文学研究×国語教育」芥川龍之介「蜘蛛の糸」の教材分析を中心に」というもので、参加者は五十名を超えたが、西原先生の洞察力あふれる分析と軽妙な語り口に、ついつい引き込まれていったものである。次いで、三月中旬に、西原先生のゼミ卒業生を中心に、西原先生の「最終講義」ご退官の会を開く予定であった。しかし、新型コロナウイルス禍により、中止となった。なんとかお聞きしたかったものであるが残念なものである。

西原先生のご講義を思い起こしながら、さらには既成概念に縛られないよう自分を戒めつつ、西原先生をお送りしたい。